

「フィリピン研修 参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 伊豫田雄太

昨年度、およそ1年間にわたり、京都市内の中学校でフィリピンにルーツをもつ子どもたち（以下、JFCとする。）に学習支援ボランティアを行ってきた。ボランティアでは、言語や文化の違いに戸惑いながらも、自身の努力や周りのサポートなどによって、日本社会でひたむきに生きるJFCたちの姿を見てきた。また、移民に関する講義を通して、フィリピンをはじめとする東南アジアから日本に移住する人々について理解を深めてきた。移民に関する講義では、ブローカーに借金をして来日し過酷な労働環境で働くフィリピン人や、中年男性と結婚する20代のフィリピン人女性、公序良俗に反する契約を結ばされたフィリピン人介護士などの事例を見、様々な構造的矛盾を受け入れざるを得ないフィリピン人の現状を学んできた。

そうした経験を踏まえ、今回、フィリピン研修に参加することになった。今回のフィリピン研修では、政府機関であるCFO(在外フィリピン人委員会)、JFC(Japanese Filipino Children)などの支援に携わるNGO(マリガヤハウス、DAWNなど)、日本で働くエンターテイナーのオーディション、人材斡旋・派遣会社、福祉施設、フィリピン大学などを訪問した。実際にこうした様々な機関や団体等を訪問する中で、海外に渡るフィリピン人移民について、様々な視点から包括的に理解することができた。特に、CFOといった政府機関や、マリガヤハウスやDAWNなどのNGO、エンターテイナーのオーディションや人材斡旋・派遣会社などの訪問を通じて、それぞれの機関・団体が、それぞれの理念の下で、フィリピン人の支援や送り出しに携わっていることを間近に見ることができた。また、これまで、フィリピン人をいかに日本社会に統合するかという、日本社会を軸とした視点に偏りがちであったが、今回、CFOやNGOの活動を知ること、国民国家という枠組みを超えた大局的な観点で、移民に関する問題について考える必要があるということを感じた。

フィリピンを訪問するのはおよそ10年ぶりであり、首都マニラを訪問するのは初めてであったが、貧富の差を改めて感じた。市街地には高層ビルが建ちならぶ一方で、川沿いにはスラム街が広がっていた。スーパーマーケットで多くの食材を買い込む中産階級がいる一方で、金を要求する物乞いの子どもにも何回か遭遇した。JFCや在日フィリピン人の抱える問題がフィリピンと日本の2か国にまたがって存在する一方で、フィリピン国内だけに目を向けても、様々な問題や矛盾が顕在していることを再確認した。ただ、我々日本人が、日々、時間などに拘束され齟齬している中、フィリピン人は、何事にも束縛されることなく、自由闊達に生活しているようにも感じた。

以下では、今回のフィリピン研修の主要な訪問地について簡潔に述べる。

まず、CFOでは、オリエンテーション(担当者によるCFOの説明)や、海外に移住する青少年を対象としたプログラム、国際結婚で海外に移住するフィリピン人を対象としたガイダンスの見学等を通して、フィリピン政府の取り組みを理解することができた。国際結婚で海外に移住する人を対象としたガイダンスでは、DVや結婚における期待のミスマッチなど国際結婚に関わる様々なトラブルの事例をCFOの職員が詳細にレクチャーしていた。このようなガイダンスは、これから海外に移住するフィリピン人にとって有意義なものである一方で、こうしたガイダンスが存在すること自体、海外で生活するフィリピン人が、一般に、弱い立場に置かれることを象徴しているように感じた。

また、CFOでは、結婚のため日本に行く人々にインタビューする機会があった。かつて日本で働いていた時に出合った男性と結婚するという女性、インターネットで知り合った男性と結婚する女性など、様々な女性たちがいた。また、40歳ほど年上の男性と結婚する女性もあり、複雑な気持ちになった。

エンターテイナーのオーディションでは、オーディション参加者に子どもがいる女性が多いことに驚いた。人材派遣・斡旋会社が行う日本語のレッスンを見学した際も、参加者の大半には子どもがいた。出稼ぎ国家であるフィリピンでは、女性が出稼ぎで海外に行くとき、親族が子どもの面倒を看ることが当たり前であるようだ。日本では、未成年の子どもは、親元で過ごすことが一般的であるため、フィリピン人が子どもを残して日本に出稼ぎに行くという現状をうまく解釈することができなかった。ただ、「子どもがいる人の方が、日本で一生懸命働くモチベーションにつながる」と、元ブローカーの方が述べているように、子どもがいるということは、母親にとってプラスに働くようである。

さらに、今回のフィリピン研修では、DWANやマリガヤハウスといったNGOを訪問した。マリガヤハウスは、主に日本人の父親から認知を得られず、経済的支援を受けることのできないJFCとその母親を法的に支援しているNGOである。父親を探し、適切な法的措置を講じるために、東京の事務所や弁護士等と協力しながら、問題解決に向け尽力していた。このような二国間にまたがるNGOは、JFCが抱える問題を一歩でも前進させる一つのカギとなり得ると感じた。

総括として、今回、フィリピン研修に参加することで、フィリピン人移民の抱える問題や、こうした問題への対応策をフィリピン側から見ることができ、私たちが日本で学んでいたことは、事象の一面しか捉えていないことを実感した。また、JFCや在日フィリピン人を取り巻く諸問題は、国民国家という枠組みや法律、制度といったマクロ的な壁の前に立ちふさがれている一方で、CFOやNGOなどの様々な機関・団体等が、それぞれのアプ

<事務局使用欄> 受付番号:

-

ローチで、少しでも良い世界をつくらうとしていたことには感銘を受けた。今後、今回のフィリピン研修で得た経験を生かし、自分自身が何らかの形で移民が抱える問題にコミットしたいと思うようになった。